大阪市長と新聞記者とのパワー闘争から見た自己と他者のカテゴリー化

－クリティカル・ディスコース分析の観点から－

大田学*
ootamanabu@naver.com

<目次>

1. はじめに
2. 先行研究
　2.1 欧州の右派政治家による言語行動
　2.2 日本における政治ディスコース
3. 分析資料及び分析方法
　3.1 クリティカル・ディスコース分析について
　3.2 文字化について
4. 考察
　4.1 自己（博識者）と他者（無知者）のカテゴリー化
　4.2 自己の神秘化、黙殺、責任転嫁
5. まとめ

主題語: 批判的社会言語学(Critical Sociolinguistics)、パワー(Power)、イデオロギー(Ideology)、自己の神秘化(Mystery of the self)、自己と他者のカテゴリー化(Categorization of self and others)

1. はじめに

近年、「ヘイトスピーチ」、「レイシスト」、「ネトウヨ」などが日本各地で見られるようになり、メディアでも頻繁に放送されるようになったことは周知の通りである[1)]。中でも日米関係にまで問題が浮上したものが「慰安婦問題」である。この問題は、橋下徹大阪市長が「慰安婦が強制連行されたとする証拠はない[2)]」という発言と、米軍に日本での風俗活動を促すような発言をしたため、メディアで積極的に取り上げられ、結果的に海外及び日本大衆社会に橋下市長の知名度がさらに広まったと考えられる。そうした影響から、橋下徹大阪市長の発言は、大衆社会への影響力が多大であると考える。

人々が発信することばには常に社会的・政治的な意味が含意されると言われている。し

＊ サムスン経済研究所 人力開発院　日本研究員兼教授
1) 詳しくは韓(2010)を参照されたい。
2) 2012年8月24日　大阪市登庁時囲み取材

かし、単純な情報伝達のための言語使用よりも、時にはそれらが強く現れる場合がある。これを最も強力に表出するディスコースのジャンルに政治ディスコースがある(イ・ウォンピョ2007)。

一般的に政治ディスコースは、国家の体制/組織と関連している活動や制度上での「政治(politics)」という特定領域においての言語使用を意味するのだが、Landtsheer(1998：5)はこれを「政治というトピックによる公的意思疎通(public communication on the subject of politics)」と定義している。また、新聞やテレビなどを通して伝達される国会討論、大衆集会、政党の会議などの政治的目的を持つ行政、司法、外交文書などが政治ディスコースの例として挙げられるという。しかし、この主張よりも普遍的と言われているGraber(1981)によれば、政治家によって使用される言語パターン(speech pattern)と定義している。特に、言語と社会理論を用いて、政治ディスコースやメディアディスコースに焦点を当てている「クリティカル・ディスコース分析(Fowler 1985；Fairclough 1992、1995；vanDijk 1998, 2000)」は、政治ディスコースにだけに限らず、新聞社、放送局などのメディア機関までを視点に入れた分析法である(イ・ウォンピョ2007)。このクリティカル・ディスコース分析法は特定の集団が固守しているイデオロギーを伝達し、正当化、そして再生産するにあたり、ディスコースがどのように利用されているかを暴くことに最終目標が置かれている。

このような知名度の高い右派政治家[3]のディスコースがどのようにメディアを通してイデオロギー的に大衆社会に伝達されているか、そして、このような政治家によって発信されるディスコースがいかに自己の正当化(神秘化)に寄与しているかをクリティカル・ディスコース分析を通して明らかにする必要があると考える。

欧米での批判的社会言語学の分野では、政治ディスコースを取り入れることが主流となっている(Geis 1987；Israel 1998；Kiewe 1998；Grinth 2002；vanDijk 1993；Bull 2000；Flowerdew 2004)。

しかし、日本では政治と言語といったテーマにおいて、言語学の分野で回避されてきた傾向があるという指摘がある(山下2011)。実際、政治ディスコースに焦点が置かれた批判的社会言語学の研究は筆者の管見の限り数が少ない[4]。よって、社会的知名度の高い右派

3) 本研究で用いられる政治家の分類法は人物辞典及び、政治学で扱われる分類法を参考にした。しかし、正確には「極右」や「極左」または、「軽武装の右派」など詳細な分類法がある。ここでは程度を表す「極」や「軽武装」などは研究の性質上相応しくないため、対象外とする。また、「保守」や「進歩」といった呼称も存在するが、比較的「右派」と「左派」の呼称が捉えやすいため、この呼称法を用いる。

4) 1990年代後半に出版された社会言語学の入門書を調査しても言語と政治の問題を取り上げているものは見当たらない(田中1996；ロメイン1997；中尾他1997；東1998 等)。都築(2004)のような研究もあるが、政治学の立場からの研究であり、社会言語学の立場の研究ではない。山下(2011)が唯一政治

政治家のディスコースに注目して、その日本大衆社会への影響を批判的に捉えることが社会言語学において、目指されるべきであると考える。

2. 先行研究

2.1 欧州の右派政治家による言語行動

vanDijk(1993：196-198)によれば、右派政治家のディスコースによる特徴的な言語行動には、「移民問題はこれ以上受け入れられない」なぜならば、「街中の民族的緊張が高まっているからだ」と弁解に差し替えられている場合が顕著であると言う。そこには神秘化が根底にあるとして政治家の神秘化がイデオロギーの一つに寄与していると述べている。右派政治家による人種差別は「店の中にいる黒人を差別したことを認めるが」しかし、「店の中には他の黒人もいた」と弁解する傾向があることを述べた(同著：198)。

この弁解ストラテジーは「その人だけを差別したのであって、黒人自体を差別したわけではない」という自己の正当化(Fairclough2001bによれば、神秘化)に貢献しているのだという。そこには必ず「否認」と「転化」が見られるとし、「私たちではなく、彼らに責任がある」、「私たちではなく本当の人種差別主義者は彼らだ」というものであり、極右の常套手段であると主張している。実際、日本の右派政治家の一人である石原慎太郎も新聞記者との会見において「これ以上3国人は(入国を)受け入れない。犯罪を犯す3国人はたたき出す[5]」と中国人を日本国内の犯罪率の原因に差し替え、弁解している点、そして「韓国の外交感覚が欠落しているのは韓国の歴代大統領全てが他国の類を見ないほど不正を繰り返すどうしようもないバカだからだ[6]」という日韓問題を韓国側にその原因を転化している点、「現在の慰安婦問題の原因は日本が過去に認めてしまったから、日韓関係を悪化させた。そんな(強制連行)証拠はない」と過去の政党に転化している点など、欧州の先行研究と一致するものがある。

ディスコースを言語学の観点から考察が述べられているが、新たな研究の可能性と現在の日本における社会言語学の研究姿勢を対象とした批判が中心となっている。韓国でもイ・ウォンピョ(2002、2007、2010)が唯一である。

5) 2010年10月1日　石原慎太郎東京都知事定例記者会見

6) 2012年8月10日　石原慎太郎東京都知事定例記者会見(都庁記者クラブ)

このような先行研究の知見は示唆に富んでいるが、その右派政治家によるイデオロギーの構築プロセスに焦点を当てた政治ディスコースの研究は少ない。また日本の政治家に焦点を当てたイデオロギーの質的かつ批判的に検討するディスコース分析はさらにその数が少なく、研究が待たれている7)。よってこのような右派イデオロギーの構築過程に焦点をおく必要があると考える。イデオロギーの構築プロセスの研究はそのイデオロギーの詳細に触れることができ、知名度の高い政治家の行使するパワーにも焦点をあてることができる。ディスコースによって、発信されるイデオロギーがパワーによって強化され、結果的に支配的イデオロギーへと強固なものに働く機能がなされることを明らかにすることは、数少ない批判的社会言語学の分野に貢献できる。

上記の先行研究は、欧州の右派政治家を中心としたディスコース分析を通して、ヨーロッパの社会問題に取り組んでいるといえよう。しかし、日本における政治ディスコースの研究は山下(2011)だけのようである。よって、日本の社会問題に取り組んだ批判的社会言語学の研究が待たれている8)。

では、なぜ日本の言語学の分野において政治を見ようとしなかったのか、この問題に直視して我々に新しい視点を導入する必要性を訴えるのが、次節の山下(2011)の主張である。

2.2 日本における政治ディスコース

山下(2011：163-169)によれば、「日本の社会言語学が黙殺・忘却・隠蔽してきた「政治」」という論考の中で、社会言語学者が政治的問題に手をつけようとしないのは、誠実な研究とはいえないと痛烈な批判を述べている。それは、欧州で生まれた社会言語学の目的が元来、言語によって困難を強いられた人々の問題解決が前提であるため、日本において純粋に言葉の究明だけに焦点を当てようとする態度は本来転倒であるのだという9)。なぜなら、イデオロギーに注目しないと、言語学者でさえ巧みな言語のイデオロギーに巻き込ま

7) 山下(2011)が唯一であるが、欧州の先学を基に批判的社会言語学の必要性とクリティカル・ディスコース分析の有効性について言及している程度にとどまっている。また、資料が2002年のものであり、10年以上の歳月が経過している資料であることから、さらなる考察が必要であると思われる。
8) 日本の社会言語学における研究の現時点に批評の余地はないが、欧州の社会言語学の一つである政治談話分析の研究の数が極端に少ない点だけは批判的に紹介したい。
9) イ・ウォンピョ(2007：167)も韓国内において、政治ディスコースの研究が行われていない点を指摘しており、韓国の社会言語学に政治ディスコース分析が活性化されるべきであると述べている。

れるからであるという主張がある(Fairclough2001b：邦訳2008)。実際、ドイツをはじめとする欧州では、社会言語学を政治との関係に注目しているのが基本的な研究姿勢である(同著：245)。山下は、日常生活に潜むパワー、イデオロギーといったものが元来、政治性を潜めていることから、日本の言語学の分野において、政治に注目しようとしない非政治性を批判しているのであろう。

上記の主張は、日本における社会言語学の研究の不誠実さを批判的に捉えたものであるが、日本の社会言語学の分野が政治と言語の関係を無視してきたことは事実であり、その研究が待たれている。

日本における右派政党の発言は、たとえ日本国内問題における発言であっても、韓国の社会問題及び日韓の外交問題にまで直結する傾向が強い。実際、韓国ではこうした発言は「妄言」と捉えられ、日韓関係にまで悪影響を与える[10)]。結果的に日本製品不買運動など、双方の感情問題及び、経済問題にまで及ぶことは、政治家によるディスコースがいかに日韓双方に重大な問題を抱えることになるかを物語っている[11)]。

そこには、政治家によって発信される自己を正当化するようなイデオロギーがある。イデオロギーは目に見えない形でディスコースを通して伝達される(Fairclough2001b；邦訳2008)。しかし、政治家のディスコースがイデオロギー的に発信されるとするならば、このようなものは自明的ではなく、不透明性をもったものを発信するはずである。

社会学者のブルデュー(1930；邦訳2003：66)によれば、「自明的な言語(ディスコース)はほとんど誤りであり、自明性は社会の真実を隠すものである」という。「真理を探求することは自明性を破壊することであり、ありきたりの問題設定の仕方を破壊すること(同著：66)」と述べている。換言すれば、目に見えないパワーやイデオロギーは常識として働き、我々の生活に無意識のうちに埋め込まれていくのである。とするならば、日本の政治家においても、ディスコースはイデオロギー的に自己を正当化し、かつ神秘化する傾向がないだろうか。つまり、ディスコースを通して、他者を排他的に押しやり、自己と他者の間に線引きをする働き、すなわちカテゴリー化をしているのではないかということである。

本稿では、橋下徹大阪市長がディスコースを通して、新聞記者の間で「自己(市長)」と「他

---

10) 近年は、日韓問題だけでなく、極東アジア全体の外交問題となり、米国をはじめとするUNまでも日本の右派に属する政治家の主張や在特会などの言動に異を唱える傾向が見られるようになった。

11) 「韓国市民連合は、ニコンカメラ、三菱自動車、マイルドセブン不買運動を展開。2009年からの光州市三菱自動車ディーラー販売店前で1年連続デモを実施し、撤退に追い込むことに成功」2012年9月26日光州ニュース。また、ソウル聯合ニュースによると、三菱自動車コリアがデモにより営業不振に陥り、韓国撤退。2013年7月1日。

者(記者)」の間に線引きをするような支配的なカテゴリー化をイデオロギー的に構築していくものと見て、その詳細を探る。よってその線引きをするためのパワー行使がどのように構築されているかにも焦点をおく。

以上、先行研究の主張をもとに以下の研究目的に従い、考察を行う。

① 橋本徹と新聞記者のパワー行使に焦点をあてる。
② 右派イデオロギーがディスコースによって、どのように構築されていくか。
③ 自己と他者の間に線引きをし、政治家によるイデオロギーがそれらを正当化しているか。
④ パワーやイデオロギーを見極めるために有効とされるクリティカル・ディスコース分析[12)]を用いて、政治ディスコースを批判的に述べる。

3. 分析資料及び分析方法

研究データは2012年5月8日に行われた橋下市長登庁時囲み取材における橋下徹大阪市長(以下橋下)と新聞記者との記者会見である。映像は参加者の言語行動をユーチューブの映像から記述した。分析対象とした資料は、映像の政治ディスコースを文字化したトランスクリプションである。その中から、市長と記者とのディスコースを質的かつ批判的に分析する。そこには橋下市長と記者団との間に笑いは見られず、緊張度が高かったことを付け加えておく。

3.1 クリティカル・ディスコース分析について

クリティカル・ディスコース分析はディスコースの中で、巧みに目に見えない形で発信され受け入れられる支配的イデオロギーやパワーを問題にする。ここでいうイデオロギーとは、常識commonsence(Fairclough2001b:2)のことであり、人々はこのイデオロギーを「常識あるいは当然のもの」として理解し、それに従った言語行動(または思想)をとるというもの

12) クリティカル・ディスコース分析は日本では批判的談話分析とも言われている。本稿では、批判的の意味が必ずしもクリティカル・ディスコースの意味と一致しない面があるため(批評と邦訳される場合が’ある)、原語のままを使用する。現在、日本語教育、社会言語学、社会学、医学、経営学など多岐に渡り応用されつつある。クリティカル・ディスコース分析の詳細については3-1で述べる。

である。例えば、市長が記者に向かって「従軍慰安婦を強制連行したとする証拠はありません」と発言したとする。メディアを通してこれが放送されると、一般の人々は彼の知名度などの影響を受け、そのまま市長の主張を信じ込んでいく可能性が高いことが考えられる。しかし、このような地位のある者から発信されるディスコースは「日常的なディスコースの中に自己の価値観や利害を正当化(あるいは神秘化)させるような構造を持つものである」(野呂2001：16)。その結果、自己(市長)と他者(記者)との間を線引きし、(例えば、博識者と無知者)双方の関係がディスコースにより固定され、自己の判断で他者を評価する行為に繋がるといえる。ここには社会的地位のある者であるほど顕著になるため、パワーが行使されていくことが同時に進行すると考えられる。

クリティカル・ディスコース分析は、不平等やパワー関係に意義を唱えるという問題意識から出発しているため、現在の社会問題に焦点を当てて、その問題点を可視化させることで社会改善を目指すのが最終目標である(Teo2000；Ohri2006)。山下(2011)によれば、現社会問題に取り組んだ批判的社会言語学の分野こそ、クリティカル・ディスコース分析の方法が有効であると述べている。また、政治ディスコースを分析するには、クリティカル・ディスコース分析が有効であると述べている(イ・ウォンピョ2007)。

本研究では、橋本市長と新聞記者との記者会見において、パワー闘争の現場に注目してそこに見られる自己と他者の間に線引きをする働きをみせるカテゴリー化に注目していく。これがメディアを通して、市長の望む方向で進められていく「常識」が、一般大衆に埋め込まれていく支配的イデオロギーの構造になると考えられる。なぜなら、イデオロギーの発信や受け入れのプロセスは受け入れる側(ここではユーチューブの視聴者)によって無自覚に自動化されてしまうからだという(vanDijk1993:262)。よって市長の主張が一つの価値観として神秘化されていくような構造になると考えられるため、こうしたプロセスをディスコース分析を行い、批判的にみていくことにする。

3.2 文字化について

大田学(2013c：50)を参考に、筆者がこの調査の目的に合わせて採用、修正したものである。言語的発話をハイライトにし、非言語行動はそのすぐ横に記した。

(表１)

( )	非言語行動の説明と特徴を説明 例(視線をそらす)(周りは静かになる)
(笑)	笑い
[	オーバーラップ(割り込み)
★	オーバーラップ後の発話
_____	傍線(イデオロギーとして見られる機能が出現している部分) 例　(←　イデオロギーが表れているところ)
(ＸＸ)	聞き取れない部分

4. 考察

4.1 自己(博識者)と他者(無知者)のカテゴリー化

ここでは、橋下と新聞記者とのパワー闘争が見られ、橋下が記者の質問や意見を受け入れずに、自分からの質問を強要し、自己のパワーを維持する場面である。そこには自身の持つ法学知識を前提に自己(博識者)と他者(無知者)をカテゴリー化している。

記者01：43人からの回答がありまして、そのうち22人がま、その、職務命令によって起立斉唱を行ったことについて賛成っとおっしゃてき[たんですが、

市長02：★うん、

記者03：で、あの、起立と斉唱をそれぞれ確認すべきと考えたという校長はわずか、1人だったんですけれどもいかがですか。

市長04：いや、それはもう各校長の判断でしょうね。ただ、職務命令の内容は起立と斉唱です。それが教育委員会教育行政の最高決定機関の決定内容です。だから、起立と斉唱を命令を命じたわけですから、あの、ま、それをしっかり守るのが教育委員会の管理下に入っている校長の職務だと思いますよ。あとはそれぞれどのように判断するかっていうのは、これは教育委員会も各校長の判断にゆだねるということは、言っていますので、もう、そこはマネジメントにゆだねますけど、しかし、職務命令の内容は起立と斉唱です。

記者05：でも実際は38人が<u>起立と斉唱を一つ捉えればいい</u>と言う風に思ったという事な[んです

けど。

市長06：★え？起立と斉唱って立ってるだけじゃ起立じゃないですか。そんな国語がありますか。起立斉唱ってことを小学生に行って起立斉唱しなさいって言って、立ってるだけで音楽の点数が取れますか。どうですか[ね。

記者07：★い[や

市長08：★いやいや、僕の質問していることについて答えて[下さい

記者09：★いや、私の方からお聞きする[ので

市長10：★いやお聞きするんじゃなくてこの場は、別に議会じゃないので、僕は答弁の義務だけを負っているんじゃないんです。どうですか。起立と斉唱について起立斉唱の言葉の中に立つだけの意味しかありませんか。

記者11：あの歌っていることも入っていますけれども、一律に歌わせることまで強制するっていうことについてはどうでしょうか。

市長12：起立斉唱命令です。この国家の中で斉唱の命令は入っていませんか

記者13：あ、そ[の

市長14：★まずどうですか。

記者15：歌[わせ

市長16：★いや、回答、答えを言わなければ僕も質問に答えません。それは対等な立場ですから、どうですか。どうですか。斉唱命令の中に斉唱の命令の言葉の中に、命令が入っていませんか、どうですか。

記者17：斉唱の命令は入っているとして、では、一律に歌わせることにおいてはど[うですか

市長18：★起立斉唱命令は、誰が誰に出したんですか。命令は誰が誰に出したんですか。まずそういう事実確認から入りましょう。命令は誰が誰に出したんですか。

記者19：命令は出していらっしゃいます[けれども

市長20：★誰が出したん[ですか。

記者21：それを[ＸＸＸ

市長22：★誰が誰に出したんです[か。

記者23：★あ、それは市長がよくご存知じゃ[ないですか・

市長24：★あいや、誰が出したんですか。ＸＸＸまず、そこを事実確認をしっかりしてから取材して下さいよ。命令は誰が出したんですか。

記者25：あの、学校[長のこと

市長26：★命令は誰が出したんですか。まず答えて下さいよ。そんな事実確認が不十分な取材なんてのはとんでもないですよ。命令は誰が出したんです[か。

記者27：市長がご存知のことを私に尋ねていらっしゃるだけですよね。それおかしなこ[とです。

市長28：★いやそんなことはない。知らないのに質問なんかできないじゃな[いですか。

記者29：★いや知ってます[よ。

市長30：★じゃ言ってください[よ。

記者31：ＸＸＸ必要ないってことです。

市長32：じゃ、僕も答える必要はない。どうぞ、次の質問。(顔を他の記者に向ける)

記者33：あ、はい、すいません。じゃ、え[えと

市長34：★答えません。そんな事実確認が不十分な取材なんかに答えません。

記者35：ＸＸＸ(別のトピックの質問と思われる)

市長36：いやああの、事実確認、命令は誰が出したんですか。まず、答えて下さい。

記者37：中西教育長じゃないですか。

市長38：え？とんでもないですよ(笑)。もっと調べて下さいよ。教育長が命令出せるんですか。

記者39：教育委員長ってことですか。

市長40：委員長じゃないですよ。(声が大きくなる)誰が行政の決定機関なんですか。(中略)そんなことも知らずに取材なんか来るんじゃないですよ。言って下さい。命令の対象者は誰ですか?

記者41：あのこ[ちら

市長42：★答えて下さい。そこが重要なんです。(記者に向かって指をさす)一律っだっていう風に言ったでしょ。命令の対象は誰なんですか。

記者43：一律強制じゃな[いんですか。

市長44：★命令の対象は誰なんですか。言っ[て下さい。

記者45：★じゃ、私からお聞き[します。

市長46：命令の対象をまず言いなさい。そこに全部答えが入っています。命令の[対象は誰ですか。

記者47：★私からお聞きし[ますけど、

市長48：★命令の対象は誰かまず言いなさい。(中略)答えられないんだったら、ここに来るな。命令を読め。まず読んでからここに来い。勉強してから来い。まず、言え。命令の対象は誰なんだ。

記者が橋下市長に、君が代の起立斉唱の条例の決定について質問をしている場面である。

記者が質問をし、市長が答弁する中[13]で、左派系記者は、国家を歌わせることに否定的な考えをもっているようである。「強制」、「別に考える(起立と斉唱と分別する)者は一人」、「一律強制」など、否定的な内容が見られる。市長は、記者の「起立と斉唱は一つ」という発言に政治的な意味よりも国語学的な解釈の問題点を取り出して、反論に出る(発話

13) 慣例上、市長は記者に対し公人という立場上、記者の質問に対し誠実に答えることが記者クラブ取材においての常識となっている。市長と記者の取材上における契約は、記者が甲、市長が乙である。法的根拠についての法令知識は不勉強を反省。

06)。「そんな国語がありますか」という本人の国語能力の優越さを表し始め[14)]、自己(市長)と他者(記者)の間に線引きするカテゴリー化を図りはじめていることがわかる。つまり、自己を博識者として、他者を無知者と追いやることがディスコースによって達成されていく。「そんなのも知らずに」、「答えられないんだったら、ここに来るな」、「勉強してから来い」の発話を見ても明らかである。

発話06において、市長による質問に対し、記者は言いよどんでしまう。しかし、市長はさらに反撃に出る。記者は07で、「いや」と言うが、市長は即時遮り、「僕の質問していることについて答えて下さい」と強要する。そこで記者は自分の方から聞くのだと反論するが、失敗に終わる(発話09)。市長はすかさず遮り、発話10において「お聞きするんじゃなくて」と記者の主張をそのまま否定する。

ここでは質問権の獲得のために、闘争関係になる。そのことは互いの質問権の獲得のためにオーバーラップが16回に及ぶことからも明白である。

そこには譲りは見られないが、注目に値することがひとつある。記者が質問をする立場であるにも関わらず、市長が質問する立場に役割の転換を図っている点である。この転換に成功している背景には、何らかのストラテジーがある。それは自己の正当化である。vanDijk(1992；邦訳2012)によれば、政治ディスコースには必ず自己の正当化が見られ、ディスコースを通して目的を達成するために否認したり、正当化させる言語行動があると主張する。

ここでは発話10.16の「答弁の義務だけを負っているわけではない」、「平等な立場だから」と自己の質問権の獲得をしやすくするための土台を作っていることに巧みに寄与しているのである。つまり、「我々は対等」→「質問もできる(市長本人)」→「だから、自分からも質問させてもらう」という構図が見て取れる。そして、随所に自己と他者の間に線引きをするためのパワーが行使される(発話46.48)。ですます体が崩され、「まず言いなさい」、「ここに来るな」など命令形に思われる語調に変化されている点である。この語調はディスコースが開始されてから、13分が経過しているため、市長にも感情的な心理が表象化してきていると考えられる。命令形は制度上、上にいる者が下の者に使用する場合にたいてい使用される。公の場で、政治家という立場の者が記者に命令形を使用するということは、パワーが行使されていることが考えられる。

イ・ウォンピョ(2002：194)によれば、「命令文のような指示詞(directive)的な話法は、パワーを行使していくのに有効であり、かつ巧みな言語的装置の一つ」として見ている。この

14)「国語の文法を勉強されたほうがいい」2012年10月1日　大阪登庁記者クラブ

ようなパワー行使をすることによって、さらに自己と他者の線引きをする働きは強固なものになり、表象化され明らかになる(発話48)。

市長が記者からの質問に答える役割から脱して、「調べてきて下さいよ」、「そんなことも知らずに取材に来るんじゃない」、「ここに来るな。命令を読め。まず読んでからここに来い。勉強してから来い。」といった露骨な言語行動は、市長による自己と他者の線引きの働きがパワー行使によって表象化されてきていることを物語っている。

特に注目すべきは、「ここに来るな」の「ここ」である。大阪市長が発信するカテゴリー化は、「ここに来るな」→「市長のいるここに来るな」→「市長のいるここは勉強した人間だけが来る」という博識者と無知者のカテゴリー化に繋がるのである。

また、大阪市長という公人としての役割から逸脱した言語行動も見られる。役割の転換に関する研究ではアイデンティティの社会構築論の観点から述べた嶋津(2006)がある。嶋津によれば、社会的ディスコースを通してアイデンティティの形成がなされるという考察をのべている。そこには一時性(temporality)という側面が存在し、ディスコースを通して構築される社会的アイデンティティは一時性が与えられることになる。

つまり、コンテクストを通して人は社会的に必要とされる「特定の人物になる(同著：57)」のである。換言すれば、市長はある一定の目的をディスコースを通して達成するために、パワーを行使し、市長という役割から逸脱し、露骨な命令形を使用することによって、パワーを行使して緊張度を高めていくのである。

前述した通り、イ・ウォンピョ(2002：194)の主張によれば、「命令文のような指示詞(directive)的な話法は、パワーを行使していくのに有効であり、かつ巧みな言語的装置の一つ」とし、さらに「テキストに記述されている事項は、発信した者の行為(agency)が縮小され、暗示的に操作され、または微妙な表現に差し替えられることにより、社会的闘争関係を覆い隠すための戦略として使用される」と述べている。したがって、市長のルーティン化された言語行動から逸脱した一時性をもつ行為は、アイデンティティの表象化といえるだろう。しかし、このアイデンティティの表象化もイデオロギー的であるともいえるわけである。

しかし、記者は市長との闘争関係において負の位置だけに留まっているわけではない。発話29.31に見られるように「いや、知ってますよ」、「必要がない」など一見弁明に見えるものの、このディスコースも記者による自己の正当化に寄与する。ここでは正当化のための闘争段階であり、かつ対抗手段の一つとして見られる。ここでは市長に遮られたため、失敗に終わっているが、記者は市長とのディスコースを通して闘争関係を維持していると考えられる。

このように、市長と記者が質問権の獲得のために展開される闘争関係が市長による役割の逸脱性という多面性を浮き彫りにすることは、市長のアイデンティティの一側面をうかがわせる。また、互いに発信させていく自己の正当化の巧みなディスコースが提示されていることがわかる。それは、自己の正当化が結果的に神秘化することに寄与し、また、支配的イデオロギーの構築のプロセスであるともいえる。自己と他者の間に線引きの働きをするカテゴリー化は「自己の神秘化」にも関与しているといえる。

4.2 自己の神秘化、黙殺、責任転嫁

次は市長が新聞記者との間でパワー構築させていく過程において、自己の神秘化を行使しながら、自己を博識者に、記者を無知者へと線引きをするパワー行使を強化させる。市長は最後まで記者の質問に答えず、別の方向性を示すイデオロギー的な答弁をする。記者はそのパワー闘争に真正面から抵抗する言動は見られないが、黙殺する形で反撃に出る。

市長01：全教員に出されているんです。教育委員会から決定したのが全教員に出された。それ知ってたか。(大声になる)知ってのか[どうか。

記者02：★ではですね。

市長03：まず、知ってたかどうか僕が言っていることは全部知っていると言って[た。

記者04：★知ってましたよ(大声になる)

市長05：全教員だろ。それが一律かどうかことぐらい言葉でわかるじゃないか。

記者06：だから一律強制ですよ[ね。

市長06：★何を言ってる。(あきれた表情をみせる)一律、ふざけた取材すんなよ。事実関係も知らずにあなたみたいなトンチンカンな記者がワーワーワーワーああやって、吠えまくってね。こうやって話したら何にもあなたの論理何も、ムチャクチャじゃないの。何にも質問するとこがこう、伝わってこない。誰に聞いても、トンチンカンですよ。これまた全部、ほらこう(カメラに顔を向けて指をさす)ホームページで出すからいいけども、トンチンカン、自分でトンチンカンさ分かってんの。

(中略)

記者07：小学校のですね。卒業、入学式で君が代を歌うと言うのは、何の目的ですかって聞かれた場合、どういう風に答えますか。

市長08：子供たちに義務課してませんよ。

記者09：いえ[いえ

市長10：★教員に課してるんですよ。

記者11：じゃ、どういう理由かっていうことを、子供たちに分かるように一つ言って頂けますか。

市長12：国家だからですよ。式典だからですよ。君が代歌うときに起立斉唱するのは当たり前じゃないですか。国歌斉唱って言ってるのに式典で、国歌斉唱って言ってるんですよ。じゃ、何で式で国歌斉唱っていう儀式があるんですか。

記者13：今のだと、子供たちには分かりにくいと思[うんですけど。

市長14：★じゃ、式で国歌斉唱は要らないんですね。それだと大相撲でもワールドカップのサッカーの試合でも、国歌ってのは要らないんですね。式でね。親が歌わなくていいと言うんだったら、子供たちは歌わなくてもいいですよ。僕らは言ってるのは、教員に対して言ってるんですよ。(中略)日本のために、仕事してるんだから、式典で歌うんだから当たり前じゃないですか。公務員に対してルール化しているんですよ。話しがムチャクチャ。国民に対しての義務じゃない。公務員の、じゃ歌は何ですか。社歌は何ですか。ＭＢＳって社歌ありますか。

記者15：ないです。

市長16：社歌ないの。あ、だからこんな記者になるんだ。(あきれた表情をみせる)国家歌いたくないんなら、ＭＢＳ行ったらいいですよ。社歌もないんだし、そんなもう、トンチンカンなやろう、質問しようがもんであろうが、何であろうが、採用してくれて職務が全うできるんだから、ＭＢＳ行ったらいいんじゃないですか。ええ。歌いたくないんだから、ＭＢＳ行ったらいいですよ。

記者17：あのう、(沈黙2秒)あはははははは(高く笑う)まあ、このくらいにしときますけども。

市長18：このくらいにしときますって何ですか。あの失礼な言い方は。吉本の新劇でもね。もうちょっと、ていねいな対応します[よ。

記者19：★どうもありがとうございました。

市長20：(あきれた表情で)これちょっとどうですかね。みなさんこの質問これぐらいにしときますけれどもって。(記者全員に訴えるようなジェスチャーをする)

記者21：いや、かみ合わないなって感じたもの[で。

市長22：★だって勉強してないんだもん。

市長が記者に対して、命令は誰が出したのかについて問いただす場面である。すかさず、市長は記者に「知ってたか」と強い口調で強要する。記者はどれほど市長の質問を軽視しているかを証明するかのように、冷静な口調で「ではですね」とトピックの転換を図る言語行動で抵抗する。その場で遮った市長はさらに追及する(発話03)。記者はこれに対し「知っ

てましたよ」と感情的な口調で反撃するが、失敗する。それは市長が「取材すんなよ」、「ふざけた」、「あなたみたいな」、「ああやってワーワー吠えまくって」、「トンチンカン」、「ムチャクチャ」の言動に対して反論がなされていないことがそれを物語る。

ここでは市長がパワー行使を全面に出しており、問いただしが行使される。「自分でトンチンカンさ分かってんの」の発話は注目される。それは市長が問いただすことにより、メディアを通して大衆全体に記者を審判していることにもつながる。なぜなら、自己と他者のカテゴリー化による支配的イデオロギーの発信による結果は、受け入れる側(ユーチューブの視聴者)によって無自覚のままに自動化されてしまうからである(vanDijk1993:262)。

公開されている政治ディスコースは、そこにはていねいなまでの正当化ディスコースが見られるのだとvanDjik(1993)は指摘する。換言すれば、「トンチンカンさ分かってんの」の問いただしは市長が発する役割から脱しており、パワー関係上で見られる教師の役割に転じているといえる。またそこには自己を博識者、記者を無知者に線引きすることにも寄与する。

記者は07、11において最初から質問のトピックである君が代斉唱に子供たちがどのように解釈するかを再度質問する。市長は「子供に義務を課してない」、「国歌だからである」と答えているが、これは質問に対する適切な答弁とは言えない。市長は意識的であれ無意識的であれ、記者の質問を黙殺しているのである(発話08、10、12[15])。

このようなディスコースを山下(2011)は、政治ディスコースにおける差別とは、黙殺ストラテジーであると述べる。換言すれば「子供にどう説明するか」、「子供にはその説明は難しいのでは」といった君が代斉唱の理解対象が子供に向けられているトピックであるのに関わらず、市長は執拗に「子供に義務は課してない」、「国民に課してない」、「トンチンカンだ」、「ムチャクチャだ」に差し替えられている点がそれを裏付ける。つまり、この市長の主張は記者の質問を黙殺しているのである。

vanDijk(1992；邦訳2011：228)によれば、「国粋主義者の自己賞賛行為は、よりよく印象づけることに関する戦略的な管理である」と述べる。この戦略とは、自己を正当化し、他者(記者)を無知者に位置づけ、「トンチンカンな記者」へと押しやるのである。そこにはまた、「国歌は社歌と同じ」という理論構築が支配的関係に近づけることに寄与するとともに、右派イデオロギーの構築にも関係があるといえよう。「国歌は社歌と同様」→「社歌のよ

15) 2012年6月23日、中之島公会堂で行われた「維新政治塾」入塾式での橋下塾長の挨拶。「メディアには距離をおく」、2012年6月1日 取り囲み取材にて「失礼極まりない新聞記者」2012年10月11日。橋下徹大阪市長記者会見にて「報道の質問に僕は耐えられない」など一貫してメディアには警戒をしていることを言及している。

うに当然歌うもの」→「国歌を拒否するのは社歌を拒否する反社会的な者と同様」→「左派はおかしな者」という構造が構築される。そして、このイデオロギーは支配的関係の中で構築されていくのである。

市長が「トンチンカン」、「ムチャクチャ」の頻度が6回に及んでいるが、記者から反論や撤回要求がなされてない事実はその支配的関係を物語る。

ここで、市長は記者の会社に社歌がないという答弁を得ると、「だからこんな記者になる」、「トンチンカンな記者」、「国家が歌いたくない人はみんなＭＢＳ(記者の会社)に行けばいい」、「トンチンカンな質問をしても採用される」、「職務が全うできる」、「歌いたくないなら、ＭＢＳに行けばいい」と再三に渡り皮肉る。しかし、記者はこれに対し真正面から闘争に挑まない。「このくらいにしておく」と反撃に出る(発話17)。

この発話は注目に値する。発話量においても一貫して、市長が支配的であったことは明白であり、また主張の強さ及び、強要する言動も市長が顕著に現れていた。しかし、最後の場で「このくらいにしておく」は、「このくらいにしておく」→「このくらいにしておいてやる」→「このくらいで終わらせてやろう」という上からの目線で発話する時に使用されるディスコースである。

これは市長と記者の前提条件である甲と乙の関係を再浮上させたディスコースであるといえる。この反撃は市長をどれほど相手にしていないかを証明させる。そしてこのことはメディアの媒介に寄与する新聞記者の巧みな闘争のプロセスの一環ともいえるのである。記者は市長とのパワー闘争関係において、発話量から見ても、負の位置にいるといえるが、フロアの放棄はせず、独自のストラテジーで対抗し、挑んでいる。

しかし、市長は執拗なまで自己の賞賛をやまない。最後まで「(あなたは)勉強していない」を繰り返す市長の発話は、結果的に最後まで自己と他者のカテゴリー化を維持する機能を持つことになる。つまり、「かみ合わない」→「その原因は勉強をしていない」→「勉強していないあなた(記者)は無知だ」→「かみ合わない原因はあなたにある」という構図が見て取れる。極言すれば、この闘争関係の原因さえも市長は記者に「責任転嫁」しているといえよう。

5. まとめ

本稿は橋下大阪市長と新聞記者との間の記者会見において、そこに見られるパワー闘争について批判的に検討した。その結果、市長のパワー行使により、市長は質問をうける

側、記者が質問をする側という役割から転換が発生し、質問権の獲得のためのパワー闘争が見られた。橋下は最後まで記者の質問を強固なまでに拒否し、先に自身の質問に答えるよう強要しているディスコースが維持されていることがわかった。そこには橋下市長の法学知識を前提にした自己の「博識者」、記者への「無知者」に創り上げるカテゴリー化の構築の成功にも寄与している。結果的にこのようなパワー構築により、市長自身の神秘化が人気向上に寄与されることにもなる。

この事実が自明性の中に潜む真実であり、政治家が発信するディスコースに隠蔽されたイデオロギーなのであろう。このような考察はイ・ウォンピョ(2007)、Fairclough(1995)が提案する政治ディスコースに有効とされるクリティカル・ディスコース分析を取り入れた手法を使用したことによって初めて可能となったものである。

右派政治家に属すると言われる橋下大阪市長と左派新聞記者の政治ディスコースを分析して、「差し替え」、「黙殺」、「役割の転換」、「強要」といったパワー・ストラテジーが明らかになった。これらのストラテジーを駆使することによって、大阪市長はルーティン化された制度の中で逸脱を繰り返しながら、自己を正当化し、イデオロギーを発信していたのである。

ここで考えなければならないのは、メディアを通していかに自己のイデオロギーが正しく(神秘化されることによって)、記者が無知であるかが伝達されているかという問題である。実際ユーチューブの数多くのコメントには、「マジキチ記者」、「記者は(を)日本から追い出せ」、「朝鮮記者(事実でないにもかかわらず)」、「共産党さんさよなら(または死ね)」、「橋下に勝てるやつはいない」、「まるで教師と生徒のようだ」、「知ったかぶりするキチガイ女の左翼記者」など、一部の偏執した傾向のあるコメンテーターである可能性が高いことを考慮しても、この数千に及ぶ右傾化したコメントは、メディアによるイデオロギーの影響を全く受けていないとは言いがたい。実際、社会的知名度の高い右派政治家[16]によるイデオロギーが2000年以降メディアを通して積極的に発信されてから、2010年以降、「新社会運動」、「在特会」、「主権回復の会」など、一般大衆にまで行動が見られるネトウヨ集団[17]が発生している。

---

16) 橋下の他に、石原慎太郎、小泉純一郎、稲田朋美、櫻井よしこ、金美鈴、西村真悟、田母神俊雄などが挙げられる。

17) 新造語である。ネットを通じて一般市民が無資格で参加する保守派政治発言をする市民団体「ネット」+「うよく」の合成語。また、社会的権力をもたない集団を指す。一方、正規登録されている右翼団体「双愛会」、「三愛同志会」、「東洋青年同盟」、「日本人連盟」、「アジア建国党」、「亜細亜民族同盟」、「国誠塾」、「日本皇民党」、「大行社」、住吉会系右翼などからはネトウヨ集団を右翼として認めない主張も見られる。詳しくは韓(2010)を参照されたい。

このように社会的知名度の高い右派政治家の大阪市長によって、パワーと右派イデオロギーが発信され、大衆社会に埋め込まれていくディスコースのプロセスには注目すべきである。これが現代社会における右派イデオロギーが埋め込まれ、蔓延していく一つの過程であると考えるからである。ここに、筆者が批判的社会言語学を取り入れた所以がある。

序論でも述べたとおり、これまで日本の批判的社会言語学は政治問題や社会問題に手を付けない傾向があった。山下(2011)によれば、政治家のディスコースといった研究テーマにおいて、日本の社会言語学では未開拓の状態にあるとのべている。

実際、政治に触れようとしない日本の社会言語学者について「研究者が競争に明け暮れ、業績を上げ、業績のために研究を行う態度の結果(山下2011：183)」という主張は改めて筆者自身再考させられる。極言すれば、社会言語学の方向性が再考される時が来たとしても過言ではなかろうか。

このような背景を考慮すれば、日本の社会言語学の研究範囲もある意味、政治談話分析を導入していく必要性があると思われる。とすれば、社会的権力とは研究者の環境にも存在することから、この問題は研究者本人である我々に突きつけられた課題でもある。

【参考文献】

김영석(2012)「일본군 성노예 (위안부) 범죄와 강제실종에 의한 인도에 반한 죄」『법학논집』제1권 제1호

이원표(2010)「「친박연대」의 혼성적 정치 정체성에 대한 비평적 담화분석」『담화와 인지』제17권 3호

_____(2007)「정치담화에서의 관여(involment)전략:노무현 대통령의연설문의 경우」『담화와 인지』제14권 2호

_____(2004)「대중매체 담화분석 –Media Discourse」『한국문화사』

大田学(2013b)「日本語教室のイデオロギー闘争 －クリティカル・ディスカーシブ・アプローチの観点から－」『日本近代学研究』第42輯

_____(2013c)「教師と学習者のパワー関係構築－クリティカル談話分析の観点から－」『日本語教育研究』第25輯

加藤晴久 編(2003)『ピエール・ブルデユー1930-2002』藤原書店

韓英均(2010)「「反韓と反日」－嫌韓流からみえてくるもの－」『早稲田リポジトリ 社学研論集』Vol.16

嶋津百代(2003)「「クラスルーム・アイデンティティの共構築」-インターアクションにおける 教師と学生のアクトとスタンス-」『日本語教育』119号

_____(2006)「「第二言語話者として生きる」－第二言語習得と学習者のアイデンティティ研究－」『多文化社会と留学生交流』第10号, 大阪大学留学生センター研究論集

_____(2010)「「文化学習とイデオロギー形成」ー日本語学習者のジャーナルの記述に見ることばの選択と獲得ー」『日本研究』第16号

野呂香代子(2001)「クリティカル・ディスコース・アナリシス」野呂・山下『「正しさ」への問い－批判的社会言語学の試み』三元社

山下仁(2011)「「共生」の内実－批判的社会言語学からの問いかけ－」三元社

Bull, Peter(2000) *New labor, new rhetoric? An analysis of the rhetoric of Tony Blair. Beyond public speech and*

*symbols:*Explorations in the rhetoric of politicians and the media, ed by Christ`l Landtsheer and Ofer Feldman, 3-16. London:Prager.

Fairclough(2000a) *'Discourse, social theory and social research : the case of welfare reform'*, Journal of Sociolinguistics, 4(2)

_____(2000b) *New labour New language?* London : Routledge

_____(2001b) *Language and Power, 2nd edition,London* : Longman.

Flowerdew, John(1996) *Discourse and social change in contemporary* Hong Kong. language in Society 25

_____(2004) *Identity politics and Hong Kong`s return to Chinese sovereignty:* Analyzing the discourse of Hong Kong`s first Chief Executive. Journal of Pragmatics 36

Foucault,M.(1993) *Der Wille zum Wissen. Sexualität und Wahrheit Bd.1.* Frankfurt :Suhrkamp

_____(1992) Was ist Kritik? Berlin: Merve(frz.1990,Lecture and discussion 1978)

_____(1996) *Diskurs und Wahrheit. Berkeley lectures 1983.* Berlin : Merve

Geis, Michael(1987) *The language of politics. New York* : Springer Verlag

Israeli, Raphael.(1998) *The pervasiveness of Islam in contemporary Arab political discourse:* The case of Sadat and Arafat. Politically speaking, ed. by Ofer Feldman and Chirst` Landtsheer, pp.19-30.London: Praeger

Kiewe, Amos.(1998) *The crisis tool in America political discourse.* Politically speaking, ed. by Ofer Feldman and Christ`l Landthsheer, pp.79-90. London:Prager

Jäger, S.(1993) *Kritishe Diskursanalyse. Eine Einführung.Duisbulg* : Diss

_____(1990) *Kritishe Diskursanalyse. Eine Einführung,* second reviced and enlarged edn. Duisburg:DISS

_____(2010)『「批判的談話分析入門」－クリティカル・ディスコース・アナリシスの方法－野呂香代子邦訳』三元社

Ohri Richa(2006)「母語話者による非母語話者のステレオタイプ構築－批判的談話分析の観点から－」『ＷＥＢ版リテラシーズ』第二号, くろしお出版

Teo.Peter(2000) *Racism in the News: A Critical Discourse Analysis of News Reporting in Two Australian Newspapers* Discourse & Society January 2000 11

vanDjik, T.A.(1996) *Racism in the press.* London : Arnold

_____(1991) *Racism and the Press.London* : Routledge

_____(1993) *Elite Discourse and Racism.* Newbury Park : Sage

* 本稿の執筆にあたり、高麗大学の嶋津百代先生にたくさんのご指導と有益なコメントをいただきました。心より感謝申し上げます。

논문투고일 : 2014년 06월 10일
심사개시일 : 2014년 06월 20일
1차 수정일 : 2014년 07월 09일
2차 수정일 : 2014년 07월 15일
게재확정일 : 2014년 07월 20일

〈要旨〉

大阪市長と新聞記者のパワー闘争から見た自己と他者のカテゴリー化

－クリティカル・ディスコース分析の観点から－

本稿は政治談話分析を行い、パワー闘争の観点からビデオ映像を基に考察を行ったものである。

ユーチューブの映像から抽出し、大阪市長と新聞記者との取り囲み取材において展開された談話からクリティカルディスコース分析を行った。そこでは、市長と新聞記者らの自己が固守する政治的立場からパワー闘争を展開させ、結果的に自己と他者のカテゴリー化の構築に寄与していることがわかった。この政治談話は右派政治家と左派系新聞記者というイデオロギー闘争の現場でもあり、その闘争が強化され、最後まで維持されていることがわかった。政治談話分析に有効とされるクリティカルディスコース分析を用いて、そこに見られる質的な双方の言語行動が見られた点において、本研究の示唆は意義あるものであると思われる。

From the Power struggle Prevailing between the Osaka mayor and newspaper repoter to Categorization of self and others

－Critical Discourse approach－

The aim of this study is to probe for political discourse analysis, have been investigated based on the Video in terms of power struggle.

Was subjected to critical discourse analysis from discourse to extract from the video of YouTube, the expanded coverage in the surrounding of the newspaper reporters and Osaka mayor. There, it has been found that is allowed to expand the power struggle from the political standpoint of self of newspaper reporters and Mayor hold fast, contributing to the construction of the categorization of self and others as a result. I found that this political discourse is also a site of ideological struggle that

left-wing-based newspaper reporter and right-wing politicians, the struggle has been enhanced, until the end is maintained. in that by using the critical discourse analysis, which is effective in political discourse analysis, linguistic behavior of qualitative both found there was observed, suggesting of this study and are intended to be meaningful.